
旨い酒には極上の肴

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『酒には極上の肴』

【著者名】

阿佐木 零

N2268BA

【あらすじ】

pixivにて投稿したSSのひとつになります。

地底を盛り上げるべく地靈殿主催で祭を行う事になり、準備から当日までばたばたする話です。

(前書き)

飲んで歌つて騒いで喧嘩する祭はまさしく鬼である幽儀を象徴するものではないかな、と思つたり。そんな光景が頭に浮かんだ事から書いてみた物語です。

それは確か、いつものように酒を片手に地靈殿へ遊びに行つた時

笑みを浮かべた私に頷くように、腰に下げる徳利の中で酒が跳ねた。

「ふふっ、悪くないもんだね」

歎を開けると更に声が大きくなり、そこかしこから笑い声が立ち上がり私の感情は嫌でも高ぶつてくれる。

「さて、行くとしようか」

言つておいて何だけど、言葉とは裏腹に機嫌自体は悪くない。むしろ時折聞こえてくる活氣溢れる声に駆け出したくすらなつてきている。

自然と喉の奥からこみ上げてくる笑いを飲み下し、立ち上がる。

「……いるせいもんだ」

唇からするりと入った液体が、喉を焼き腹を満たしていく。同時に体が熱くなつていくのを感じ、開け放つた窓から吹き込む冷たい風が冷やして行つてくれる。

そうして何杯になるかわからない酒を飲んだ後、外から入る雑音に耳を傾けた。

だつた。

地靈殿執務室　要はさとつの仕事部屋なんだけれども　でさとりが両手で頭を抱えて悩んでいたのだ。

何でも、とある神社によつて直通エレベーターが作られた今、以前よりも多少は簡単に地上と行き来が出来るようになつてはいるが逆に深刻な悩みが出来てしまつてはいるようだつた。

つまり、

「……地底を賑やかにするにはどうしたらいいんでしょうか？」

絶望にも似た沈んだ聲音で地靈殿の主、古明地さとりは呟いた。だだつ広い広間に声だけが反響し、得も言われぬ虚しさに包まれた私は酒を一口飲む事にした。

「うへん、でも何かあります？　あたいは今ままでもいいと思いますけど」

「やはは、と脳天気に燐が言つけれど、さとりは真剣なようだ。更に頃垂れ、ぼそりと告げる。

「燐だけじゃなく、みんなそうだから地底がどんどん暗くなつていの……暗い、暗い……そう、暗いの……」

「え、えーっと」

自分でも地雷を踏んだのがわかつたのか燐が冷や汗を垂らす。同時に、救いを求めて視線を彷徨わせるとぴたりと空に止めて、

「うひゅ？」

首を傾げた空を見てため息をついた。

「やっぱ何でもない」

凄まじく失礼な燐だった。あんたも同じじゃないか。そしてこの流れだと次に刺されるのはわかってる。

「勇儀は何かある? ほら、酒入ってる緩い頭でさ」

「ぶつ飛ばすよあんた」

賑わう事、ねえ。

私としてはどうでもいいんだけど、さとりの悩みもわからなくもない。私だって静かな地底の町よりも活氣づいている町の方が良い。

静かに飲む酒も美味いけど、騒がしい中で飲む酒もまた美味しいもんだし。

「ねーねー、さとり様。何の話してるんですか?」

「空、貴方は……」ほん。地底を賑やかにするにはどうしたらいいのかって話をしてるの。何か良い案とかない?」

「んー」

顎に入差し指を当て、小首を傾げた空はうんうん頷いた後、ぽんと手を叩いた。

「前に縁の巫女から聞いたんだけど、地上には祭とかこののがあるつて！」

ふむ。なるほど、祭りか……。

悪く無い案かもしれない。

「へえ、悪くないね。私としては良い案じゃないかつて思うよ、さとり」

人が集まる。地底の事も知つてもうかる。賑やかにもなる。準備とか細かい部分を無視すれば悪くない案じゃないだろうか。

「なるほど。一時的な手段としてはアリですね」

さとりも同じように考えたのか、しきりに頷いていた。
いひして。

空の提案から始まつた地底復興企画の第一弾が幕を明けたのだった。

休憩所となつてゐる長屋から外に出ると、喧騒が耳朶を打つた。いつもは閑散としている地靈殿まで続く長い通りは今や屋台が軒を連ね、等間隔を提灯で照らされている。
見るからに華やかになつた通りは人や妖怪でひつた返していて、普段の姿からは想像出来ないくらいに騒がしい。

「さすが祭。やっぱり良いもんだね」

誰ともなしに呑いて酒を一口煽る。

普段は見れない姿に知らない内に心が踊っているのが自分でもわかる。さすがにはしゃいだりはしないけれど。

というか、鬼である私がこんな賑やかな場所で騒ぐと最悪祭りが即刻中止になりかねないしね。

さすがにそれは何といつか……せどりがまた心労で倒れかねない。

「あうひー。」

「わ、ひとつ」

考え事をしていたら小さいのがぶつかってきた。

私の腰ほどまでしかない、人間の子供だ。祭りの楽しい空気に引き寄せられて遊びに来たんだろう。

「「」、「めんなさー」……」

私の角を見て妖怪だとわかったのか、怯えた様子で見上げていたので、頭に手をおいてくしゃくしゃにしてやる。

「わ、わわうー。」

「あはは、気にしないでいいよ。今日は特に無礼講なんだからね」

ニカツと笑うとその娘は顔を輝かせ、

「うんー。」

大きく頷いてから駆けていった。

「じゃーねー、角のお姉ちゃん!」

「危ないからちやんと前を向きなー。」

やれやれ。

賑やかなのは子供達だけじゃないみたいだ。
騒がしさに釣られてやつて来たのか妖精の姿も見かける。

「西発西中ー こんなあたいにかかればラクシヨーねー!」

「だーかーらーー。的を凍らせるのはダメって行つたでしょー。お店の人だつて困つてるじやないー。」

露店荒らしに近いけど、まあ周囲も楽しんでいるようだしいいか。
良く見れば、その他にも見られない奴らは沢山いる。

「へえ、予想以上に混んでるじやない」

「本当!。あ、橙。逸れなこよつこね」

「はーー。」

普段は寝てばかりの大妖怪の姿まで見えるんだから、本当どれだけ注目を集めてるんだか。

いや、それだけ幻想郷が暇つて事かね……？

ま、いいさ。

「さて……」

まだ祭りは始まつたばかり。

今日は無礼講だつて言つたばかり。本来の仕事もこなしつつ、私も屋台巡りしないとね。

まずは何から見てまわろうか。

私は近くにあつた露店に顔を向けたのだった。

朝にたたき起ひそれでさとりの執務室へと来てみれば、私以外はみんな集まつているようだつた。

会議一日目。

いやもう何だかわからないけど、定例化が決定したようだつた。

執務室の壁に「デカデカ」と

【祭、成功!!】

つて書かれてある。標語の体裁すら整つてないけどきっと標語なんだろう。訳がわからない部分にさとりが追い詰められている何かを垣間見た気がする。

ともかくにも、昨日の議題で祭りをやるところのは決まったのだけど、具体的にどんな祭りにするかまでは全く決まってなかつた。そもそもな話、私達にそんなの期待する方が間違つてるけど、さとりは微塵も思つてないらしい。

相変わらず良い娘だねえ……将来が心配になるよ。

「さて、皆さん祭をするに当たつての案はありますか?」

地靈殿執務室に集まつているのはさとり、燐、空、私こと勇儀、

パルスイ、ヤマメ、キスメだった。ここしほいつもの事ながらいな
い。

「ふうん、祭ね……また騒がしい企画を立ててるじゃない

じとつとした田で言つたのはパルスイだ。橋姫のくせに何でじつ
いうイベントが嫌いなんだか。

試しに訊いてみたら、静かな方が好きだから、だそつな。じつせ
本音は恋人同士でイチャイチャしてゐるを見て妬ましくなるからだ
つてじつのは隠さなくともみんなわかっている。

「はい。やつぱり地底にも賑やかさは必要だと感づんです。なので
決めました、昨日」

「強引すきんでしょ……」

せとつもわかつてゐるんだらう。
さり気なく目線を空の方に向け、意を組んだパルスイもまた納得
したよつに頷いていた。
うん、つまりはそういう事なんだ。

「うるさい？」

空が忘れない内にやつてと決めてやつむやつおつむに魂胆。

「それで、せとつはやつしたいのや」

「私は……」

せとつは腕を組んでうそうそと呟りだす。

あー、これは訊いた私が馬鹿だつたのかもしれない。

「えっと、何も問題が起こらないならそれで」

「何よそれ」

さとりが捻り出した答えに呆れ顔で言葉を返すパルスイ。気持ち
はわからぬもない。

でも、祭の中身ね。私としては何も着飾る必要なんて無いと思つ
んだけども。

「さとり」

「はい？」

地底に籠つてると考えも暗くなるのか、それとも単に思いつかな
いだけか。

これだけのメンツが顔を突き合わせていても話は脱線しても良い
案はピクリとも出でこない。

「もう普通にやればいいんじゃないの？」

「はい？ 普通、ですか？」

「そう」

私はどかっとあぐらをかけて座り、腰に下げていた酒を煽り、さ
とりに向かつて掲げてみせる。

「美味しい酒と美味しい飯、そして人。これだけありや祭なんて充分じ

やないの。余計なもんなんていらないさ」

そもそもな話で、何かに捧げたりする祭じやないんだから、深く考える必要なんて無いんじゃないって思う。

地底で人と妖怪入り乱れた祭を行う。

楽しんだらそれで成功。楽しかったら心が踊り、賑わいが溢れ、地底が暖かく包まれる。

上々じゃないか。

「あんたはただ酒が飲みたいだけでしょ？」

半眼で訴えてくるパルスイに、

「違うね、美味しい酒が飲みたいのさ。でもね、こういうのは雰囲気が大事じゃないか。私は祭の雰囲気でも酔いたいんだよ」

やれやれ、と肩をすくめているパルスイだけど、断言してもいい。祭には現れる。そういう妖怪なのだ、彼女は。

「 そう、ですね。そうしましょ」

私の言葉を訊いて熟考していたさとりだつたけど、何度も頷いて決心したようだつた。

「勇儀さんの仰るように普通に祭を執り行いましょう。私達だけじゃなくて、地上の人たちや妖怪達も呼んでみんなで」

かくして、地底の祭は決まつた。

人間も妖怪も神も天人も何もかも関係なく、飲んで歌つて騒いで楽しむためだけの自分たちに捧げる祭が。

その日の内に号外として天狗によつて幻想郷全体に便りが配られた事により、私達の想像以上の人数が集まつたのはまた別の話だ。

果たして私があの時発言した以上の効果が出ているものだから、正直に言つと驚いていた。

「まさかここまで集まるなんてねえ」

酒を一口煽つてから通りを見渡すと、見知つた顔があつた。
そいつは尻尾を立てて興味津々に屋台に並べられている鰻に見入つていた。

店主が苦笑いを浮かべているあたり、どうせずっと張り付いているんだろう。

「お燐、どうしたんだい？」

「あ、勇儀。今忙しいから放つておいて！」

「口を一瞬振り向いて、また視線を元に戻す。その前に涎を拭け。

「連れがすまないね」

「いえいえ」

店主は小さな羽をパタパタと動かして微笑んだ。雀の妖怪だろうか？ 人懐っこそうな顔で商売に向いてそうな印象を受けた。

放つて置くと饅に涎のタレを塗りたぐりそつと燐を引っぺがし、

「とつあえず一人前をおくれ。コイツ張り付いてて邪魔だろ?」

私がお金を差し出すと、

「い、いえいえ! ほら良じ密寄せ お密さんのお注意を乞いてくださいますから」

「正直だね」

「あ、あははは……」

乾いた笑いを返す店主にお金を渡し、燐にご飯を口えて前に座らせる。

そして酒を一口飲んでから、

「じゃ、私はもう行くよ。何かあつたらぶつ飛ばしてくれていいか
らね」

「いえ、さすがにお密さんですか」

燐を残してその場を後にする

「あづづ
。一。
」

どうせ猫舌なのを忘れて焼きたての饅にかぶり付いたんだから。
見なくともわかる。

燐の悲鳴につられてやつてきたキスメに肩を竦めて後ろを指差す。

「あ、……くすり、いってきます」

「うん、頼むよ」

呆れ顔のキスメに後を任せ、私は祭の雑踏にまた潜りこんだ。

会議の結果、場所は地底の中でも地靈殿に向かつて伸びている一番大きい通りを使う事になった。

そして長屋が軒を連ねている部分全部で屋台や出店を開き、通りに面している長屋も休憩所として使用する。

ただし、騒ぐのが大好きな人間と妖怪が集まるのは田に見えているので、運営や監視役も必要になつてくる。

これには私、勇儀とさとりが主だつての責任者として、後は天狗たちが助つ人で白狼天狗を、そして竹林の警備員が力を貸してくれる手はずとなつた。

まさしく幻想郷を巻き込んだ祭になる。

「ふふつ、楽しみだね」

喧嘩と酒と祭は「れだから止められない」。

心が踊るのと同時に笑っていたためか、さとりがおつかなびっくりな様子で視線を向けていた。

「な、何を笑つているんです?」

「ん、別に。ただ楽しいなつて思つてね」

通りに視線を向けると、さとりも釣られるように視線を向けた。視線の先には、天狗の便りを見て集まつた祭好き、騒ぐの大好きな人間や妖怪達が共同で祭の準備を勤しんでいる。

白狼天狗達も警備として借りられて、今もしつかりと各自の仕事に就いてくれている。

「燐たちは やつぱりいないね」

それに比べて地底の面子と来たひ……。

「あの子たちは”ペット”だから。祭を楽しんで欲しい気持ちもありますし」

「そつか

きつといこしに話をふつかけなかつた理由のひとつもそれなんだろつ。

「ええ、お姉ちゃんですか」

「……まつたく

どこか誇らしげに微笑むぞとつは背伸びしていふやうで、でもしつかり姉として立つてゐる凜々しさもあつて、

「わつ、ゆ、勇儀さん！？」

気が付けばひとりの頭を撫でていた。

抗議の視線を向けてくるぞとつから顔を背け、誤魔化すように酒を煽る。

「 もう。髪がくしゃくしゃになつたやつたじやないですか」

とんてんかんかん。
とんてんかんかん。

屋台が組み立てられる音が地底に響く。

ひとりの提案から始まつた今回の祭だかど、それでわいへして見ていろと心が騒ぐ。今か今かと楽しみでたまらない。

「ねえ、せとつ」

「はー?」

「成功をむかづね」

「 はーー」

「ひして、祭の開催日は刻一刻と近付いてきていた。

喧騒に包まれてゐる通りを地靈殿に向かつておおよそ半分は歩いた頃、大きな花火が上がつた。

いや、あれは

「弾幕?」

赤と白、黒と白。

ふたつの影が祭の提灯と弾幕によつて照らされ、空を舞つてゐる。騒ぎを聞きつけた人や妖怪が騒ぎ出す。

「巫女と魔法使いよ。どつちが強いか喧嘩になつて始めたやつたわ」

「なるほど。で、パルスイ、あんたはここで何してんだい？」

「見物よ、見物」

酒を片手に意地の悪い笑みを浮かべてゐる。
あのふたりを焼きつけた犯人がわかつた気がする。

「酔つてるね、パルスイ」

「別に。あんた程じゃないわ、勇儀」

「さてね」

再び見上げると、ふたりは互いに罵り合いながら弾幕合戦しているが、前に見た時よりふらつてゐるのがわかる。

大方、弾幕」ひとつをあつ始める前に酒を飲んでいたからだらう。

「あの酔っぱらいが……」

頭が痛くなつてきた。

人がせつかく祭の雰囲気を楽しんでるといつのこと、見事にぶち壊してくれた。

「だあー、邪魔よあんたらー！」

騒ぎを聞きつけた白狼天狗たちがやつてくるけど、蹴散らされてしまつ。酔つ払つても楽園の巫女である。

「くっ、ははは……」

急に笑いだした私を見てか、周囲がいっせいに距離を開けるが知つた事じやない。

何て言つたつて、祭での私の役目は

「祭をぶち壊してくれた責任は取つてもうつよー。」

そうして私は巫女と魔法使いに向かつて一気に地面を蹴つた。

その後は なんといつか酷かつた。

酒と喧嘩は何とやら。

大立ち回りした拳句、白楼天狗ビックリか氷精やら何やら巻き込んで大事になつてしまつた。

祭そのものには何の問題も無く、死傷者もなく済んだのはいい。

ただ、

「 聞いてますかー!？」

「 も、もちろんー!」

主催者である小さい地底の主の前で正座させられていた。

今回ばかりは私が悪い部分もあるから仕方ない。

「部分も？」

「ああいや、私が悪いんだよね、わかってるよ。うん、わかってる」「まつたぐ。取り押さえの側が暴れてどうするんですか」

「……そうだね。うん、わかつてはいたんだよ」

あの後、三人で暴れまわっていたら騒ぎを知ったさとりが現れて、その隙に巫女と魔法使いは逃げ出した。
どうせまた祭に溶け込んで騒いでいるんだろうけど。

「はあ。靈夢さん達が来てる時点で何かしらの騒ぎが起るだろ？
なあ、って思つてはいたけど」

諦めにも似たため息をつくさとり。

想像以上の人数が集まっているのだ。裏方（私含む）としては大変なのは間違いない。

それぞれが自制を効かせてくれば誰も文句は言わないけど、そこで自制を放り出すのが幻想郷の住人たる所以でもある。

「うう、頭が痛くなつて……はつ、駄目よさとり。こんな程度で挫けちゃ駄目！」

さとりがいよいよもつて壊れてきてる気がする。
痺れてきた足に鞭打つて私は立ち上がる。
祭へと視線を送ると、見知った顔触れと視線が合つた。

やれやれ。

「そつよ、無事に乗り切つて地底つて良い所だなー、住んじやおつかなーつて思つてもらうのが目的なんだから何かあつたらもみ消してしまえばいいんだわ」

「てい

バシイツ！

「いだつ！」

軽く頭をチョップしたら、さとりの顔が地面にぶつかった。

いやあ、

「酔つてるみたいだね、はつはつはつ」

「はつはつはつ、じゃないです！ 力加減を間違えたとかそういうレベルの力じやなかつたですよー？ 頭が割れかけました。割れるかと思いました！」

「まあまあ、いいじやないか」

「良いわけがありません！」

宥めても止まらないさとりの視線に入るように、体を少しだけずらす。

「大体、 あつ

私は両手を上げて、視線を完全に譲る。

「 そつか

その光景を見てさとりの顔が綻んだ。

怒りも愚痴も忘れて、ただただひとつ感情に飲まれていた。

「ねえ、さとり。改めて訊きたいんだけどさ」

私も同じように視線を向ける。

祭の賑わい溢れる通り。いつもは閑散としている寂しい通りだ。
だけど今は

提灯の灯火が地底を照らし
人の賑わいが活気を呼び

妖怪が騒ぎ

暗い地の底を鮮やかに彩つていた。

「開催して良かつたかい？」

こいしも

燐も

空も

ヤマメも

キスメも

みんなが私たちを見て手を振っていた。

食べ物やお面、玩具など思い思いの戦利品を持ちながら。

「　はい。 もうひと

そう言つたやとつの顔も同じよつと輝いていた。
私はいつもよりのように徳利を掲げ、

「そつか

一気に煽つた。

「勇儀、せとり！ あんた達もいつかは来なさよー。」

「あいよー。」

急かすパルスイに釣られるよつていつ一度祭へと足を踏み出す。

いつもよつ賑わう地底はビームでも輝いているよつで。
地上から見上げる星空と同じよつて もじかしたらそれ以上に。
私たちには輝いて見えていた。
だから当然のよつて

今日の酒は格別に美味かつた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2268ba/>

旨い酒には極上の肴

2012年1月5日19時47分発行